『月まで残り…キロ。』

作者　淺羽　一

あの月まで後残り二十五万と飛んで四百キロ。快晴の夜空をV字型に分けるような深夜三時の田舎の高速道路に他の車の影はなく、慣れないマニュアル車でもただ真っ直ぐ走る分には問題なかった。時折、緩やかなカーブが現れアクセルを浮かせざるを得なくても、シフトダウンをせずに済む程度にはすでに速度は十分すぎるくらいだった。あたかも本来の持ち主がいかに愛情深かったかを証明するかのごとく、走行距離が十万キロを軽く超えてもストレス無く加速する古いスポーツカーのエンジンは、止まっている時よりも走っている時の方が遙かに強く、滑らかに動くと言うよりもまるで心臓の鼓動みたいな震動をクッションの硬くなったシート越しに伝えてくる。その感触は、決して同じなわけがないはずにも関わらず、さながら昔、歳の離れた兄に背負われて家へと帰っていた幼稚園の頃のものに似ている風に思えた。だから俺は、頭の中ではこんな事をしたって無意味どころか危険でしかないと理解していたのに、どうしてもアクセルペダルの裏が車体に当たるまで足に力を込める事を止められなかった。兄が死んでからまだ百時間さえ経っていないのに、その体はもうすでに空へと流れていた。

本音を告白すれば、あの兄が亡くなってこんなにも心が苦しくなるだなんて、端的に言って驚きだった。むしろ、高校を卒業して地方の大学へ進学すると同時に実家を出て以降、俺はほとんど実家に寄りつかなくなっていたし、ましてや二年前に大学を卒業して社会人になってからはいよいよあそこは記憶の中に捨ててきた過去のようなものに成り下がっていた。いや、それどころか内心では兄を馬鹿にしてさえもいた。三十の半ばを過ぎ、さらに四十を目前にしても結婚しなければ実家を離れる気配もなく、母親と二人であの狭い家に暮らしているなんてとんだマザコンで、なんて情けない男なんだろうと。自分が何の不自由もなく高校や大学に進めたのが誰のおかげだったのかなんて、そんな当たり前の事さえちっとも顧みようともせず。

父が突然の病気で死んだのは、俺がまだ中学生になったばかりの頃で、兄は当時、数年前に地元の大学を卒業して就職した小さな運送会社でようやくそれなりの給料を貰え始めた頃だった。両親が歳を取ってから生まれた子供であった俺は、それまで存分に甘やかされていた分余計に一転して変わった生活に反感を抱き、それはそのまま元からあまり体の強くなかった母でなく、急に口うるさくなった兄へと向かった。

今にして思えば、単に自分が未熟であり、対して兄はそんな事実に甘えていた愚弟と違って未熟ながらも懸命に成長しようとしていただけなのだと理解出来る。だが、俺がやっとそんな風に考えられるようになった時にはもう俺は実家を出てしまっていて、俺達は「兄ちゃん、あの頃は本当にごめん。そして、ありがとう」なんて素直に言い合える関係ではなくなっていた。小学生の頃は「兄ちゃん、兄ちゃん」とあんなにも懐いていたくせに、いつの頃からか「兄貴」としか呼ばなくなって、大学に入ったらそれも使わずにたまの電話でも「あんた」としか呼ばなくなって、最近じゃいっそ会話する事さえほとんど無くなっていた。兄が通勤途中に車に轢かれたと突然の連絡を受け、取るものも取りあえずレンタカーのセダンを飛ばして実家近くの病院へ着いた時にはすでに、兄は帰らぬ人となっていて、自分でも意識せず漏らした「兄ちゃん」に応えてくれる相手はもうこの世に一人もいなかった。顔の傷や汚れをぬぐわれた兄の顔は綺麗だったものの見るからに中年で、数年ぶりに会った母親も思い出の中の姿よりもずいぶんと老けて見えて、まるで自分だけが取り残されてしまったような感覚を抱いた。小さく背中を丸めて兄にすがっている母の代

わりに医師や看護士などから今後の説明を受けながら、こんな風に家族の代表として、或いは「大人」として世間に接するなんて初めてだなと、何故だかやけに冷静な頭で思っていた。

確かに自分も同じ家族の一員だったのだとようやく感じられたのは、病院から連絡を受けた葬儀屋と共に兄を実家へ連れ帰った時だった。そこにあったのは、門の周りに植えられた花の色こそ違っていたものの、間違いなく自分の家だった。そして車庫には案の定、兄の愛車が止まっていた。兄が大学生の頃に必死にアルバイトをして買ったものだから優に十五年以上は経過しているにも関わらず、鼻が長くて平べったい丸目のそれはつい昨日に買ってきたばかりみたいに車体は勿論、タイヤのホイールどころか黒いゴム部分に至るまでピカピカだった。不意に、「兄ちゃんすげー」と家にやって来たばかりの新車に目を輝かせる俺に向かって、「あぁ、すげーだろ」と嬉しそうに笑っていた兄の声を思い出した。どちらかと言えばお堅い人間だった父や母に二人乗りのスポーツカーは不評だったが、それでもあの頃の俺は心から純粋に颯爽とハンドルを切り、はたまた男らしくシフトレバーをガコッと鳴らす兄を格好良いと思っていた。それなのに、「いつまでもあんなボロくて燃費も悪い車に乗って…」と鼻で笑うようになっていたのは一体いつの頃からだっただろう。やっぱりそれも呼び名が変わってしまったくらいだったのだろうか。

しばらくして到着した他の葬儀屋に言われるまま和室を整え、兄を寝かし、それから彼らによっててきぱきと用意されていく通夜の形を尻目に、俺はあれこれと指示される「常識」を機械的に頷きながら聞いていた。母は一秒たりとも兄の側を離れようとせず、その姿は次の瞬間に忽然と消えてしまったとしても、或いはもっと単純にそのまま永遠に眠ってしまっても驚けなさそうなものだった。訃報に関しては近くに頼れそうな親類や特別に兄と親交の深かった―要するに恋人などもおらず、その日の夜になってようやく少し落ち着いてから、兄の勤め先と自治会の会長に連絡するだけで事足りた。兄の会社の社長さんは通勤中の事故と言うこともあり、電話口できわめて気の毒そうに、もしくは申し訳なさそうに嗚咽を漏らしていた。彼は何度も何度も「彼ほど真面目で人柄の良かった人間は滅多にいない」と言ってくれた。そしてそれ以上に何度も何度も何度も何度も「すいませんでした」と繰り返していた。最後に、親戚付き合いがほとんど無くて頼れる相手がいないのだと思わずこぼした俺に、社長さんは通夜や告別式の手伝いが必要であればいつでも彼の会社で動ける社員をこちらへ向かわせると言ってくれた。本来であれば丁重に断るべきだったのかも知れないし、そもそも葬儀は家族だけで済ませるつもりで手伝いならば葬儀屋がいたのだが、結局、俺はありがたくその申し出を受け入れた。自分が楽をしたかったと言うよりも、何か間違いを犯してしまってはいけないと思った事と、それ以上に兄が普段にどんな人間であったのか彼らから聞いてみたいという気になった事が理由だった。改めて考えてみても、俺はろくに外の兄の様子を知らなかった。お坊さんと式場の手配が間に合い、お通夜は翌日に、告別式は翌々日に行われると決まった。

その夜、決して絶やしてはならないと言われた蝋燭の火の番を母に代わってする傍ら、兄の部屋から持ち出してきたアルバムや手帳などを彼の隣でめくってみた。そこから見えてきたものは、お世辞にも派手とは言い難い人生だったが、だけど同時に兄らしいものだった。兄は恋人と別れた後もこっそり写真や思い出の品を残しておくタイプだったらしく、押し入れの隅に隠すようにしまわれていた箱の中には幾人かの女性の写真などがあり、中

には少ないながらも兄と二人で並んで写っているものもあった。四角い世界で笑っている兄はどれも皆、今よりもずいぶんと若くて、むしろ現在の兄よりも俺の記憶の中にいる兄の姿に近かった。「女にモテたかったらな、格好良い車に乗れば良いんだよ」と自信満々に語っていた兄の言葉を思い出した。

なぁ、兄ちゃん、と俺はつい笑って言った。この人達はみんな、あの助手席に乗ったんだよな、と聞いた。そんでデートの時は決まって気取った音楽なんかを掛けたりしてたんだよな、かつての兄との会話を再び再現しようとするみたいにそう続けた。普段に家でいる時なんかは流行りの邦楽くらいしか聴かないくせに、ここぞと言う時には決まってジャズやフュージョンなんかを車内で流す癖があった事を俺は知っていた。中でもかつての兄のお気に入りはジャズの名曲で、その題名は日本語に訳すと「私を月に連れてって」。

翌日は朝から書類の準備や各所への支払金の計算で何かと忙しく、俺が自分の会社へその後の報告をしていなかったと気付いたのは昼過ぎにその日初めての飯を食っていた時だった。慌てて連絡すると、上司は一言「大変だったな」と言い、「だけどお前の代わりはいないんだから、落ち着いたらちゃんと来いよ」と言ってくれた。いつもは「お前の代わりなんていくらでもいるんだ」と嫌みったらしく言ってくる上司だっただけに驚いた。あんなにも自然と「ありがとうございます」と「すいません」を告げられたのは、おそらく入社して以来初の事だった。

通夜は実家近くの式場で、一番小さな会場を使って行われた。金銭的な事もあったし、規模的にもそれくらいで十分だと思っていた。だけど始まってしばらくして、もう一つくらい大きな部屋にしても良かったなと思った。どうしようもなく悲しい場で、明るい気分になんてなれっこないはずなのに、兄の為に泣いてくれる人間がこんなにもいるのかと知る事は単純に嬉しくて、何より誇らしかった。香典は一円も受け取らなかった。

そして今日…いや、日付で言えば昨日、告別式が行われ、兄の遺体は荼毘に付された。弔問客とは式場で別れ、火葬場へは俺と母の二人だけが付き添った。空は快晴で、雲一つ無く、これなら天に昇っていく時に邪魔になりそうなものは無いだろうなと思った。最後の別れを済ませた後、俺と母はほとんど会話もなく待合場所でぼんやりとしていた。やや離れた場所には余所の家族の一団がいて、時折、その一員である幼い姉弟の声が届いてきた。見るからにしっかり者のお姉さんとこまっしゃくれた弟という感じで、ふと気付けば母もそんな子供達を眺めていた。やがて、別れから二時間もしない内に呼び出しがあり、椅子から立ち上がれなくなっていた母を支えて行ってみればすでに…。木の箸と竹の箸を一本ずつ使って骨をつまみ～なんて説明を聞く間、母はずっと睨み付けるような目でそれへと視線を注いでいた。華奢な腰に回した右腕には絶え間なく母の重みと震えが伝わっていた。まるで兄一人だけが時間を遡ってしまったみたいに、その体は母の胸に抱かれるほどに小さくなっていた。

三人で家へと帰るやいなや、母は少し眠りたいと言って寝室へ行った。だから俺は夕方になったら起こすよと伝えてそれを見送った。はっと意識を取り戻した時、俺は喪服姿のままソファの上で横になっていて、時刻はもう日付の変わる直前だった。ほんの束の間、どうしようかと思案したものの、母が起きてきた様子も無かった為に、俺は改めて今晩はもう眠ろうと考え、その為に玄関の戸締まりを確認し、それからリビングの雨戸を閉めようとして…今夜が満月だったと知ったのはその時だった。気付けば俺は兄の車の鍵を握り

しめて家を飛び出していた。小さな革の飾りを付けられたそれは昔ながらの金属製の鍵だった。
生まれて初めて運転席に座ったスポーツカーの感想は、天井ってこんなに低かったっけ、だった。実際、そこは狭かった。だけど不思議と窮屈な感じはしなかった。それはさながら戦闘機のコクピットみたいな感じだった。
数年前に教習所で習った手順を思い出しながら、左足でクラッチを切り、左手でシフトレバーをセンターに戻して、右足でブレーキを踏み、それから普通の車のそれよりもやや太めのハンドルを握る手を右手から左手に替えて、空いた右手でキーを回した。ギャギャギャっと大きな音が響いた直後、尻の底から噴き上がるような低音が車全体を包み込んだ。その迫力はさして車に興味なんて無かった俺にも十分すぎるくらい伝わるもので、低燃費や環境への優しさなんて売り文句ばかりで飾られた車では絶対に味わえなさそうなものだった。ライトを付けて、サイドブレーキを下ろして、ゆっくりとクラッチを切ってギアを左上へと押し込んだ。
いきなりエンストなんて無様な状態を晒さずに済んだのは、俺の運転技術が優れていたわけでは決して無く、ただ単に慎重すぎるくらいに丁寧にクラッチを繋いだからだろう。それでも一速に、一速から二速に、はたまた二速から三速へとギアチェンジをする際には、車はあたかも「私はそんなに簡単な女じゃないの」とでも言わんばかりにがくがくと振動した。それはもう本当に怒った女に両腕で体を掴まれて前後に揺さぶられているような感じの激しさで、俺は思わず、だって俺は兄ちゃんじゃ無いんだよと声に出し、目一杯にアクセルを踏み込んだ。結果、速度を上げれば上げるほどクラッチ操作時の不快感は減った。だけどやっぱり信号待ちや曲がり角で停止したり徐行したりする時は決まってがくがくで、だからこそおかげで俺は勘違いをせずに済んだ。クラッチを切るたびに変化するエンジン音の向こうから、「車ってのは素直なんだよ」と助手席に乗せた俺へ自慢気に語る兄の声が聞こえた気がした。
「車に乗っていて不快に感じる事があるとしたら、それはつまり運転している人間が乱暴に扱っているだけなんだよ。女と一緒さ。どれだけ慣れたつもりでいても、ちょっと気を抜いた途端にそっぽを向く。でも、それって実はもの凄く大切な事なんだぜ。だって、そのおかげでいつまで経っても最初の頃の愛情を忘れずにいられるんだから」
助手席に横顔を向けたまま、最高級の女ばかりを相手に映画さながらの恋愛のみを楽しむ伊達男よろしく語る兄に、かつての俺は呆れるどころか素直に憧れていたはずだった。俺も大人になったら兄ちゃんみたいに格好良い男になりたいだなんて真剣に考えていた。まったく、どれだけ単純なガキだったのかと苦笑するしかない。だけどその一方で、誰の車に乗ってもすぐに酔ってしまう俺なのに、けれど兄の横に乗せてもらっている時だけは不思議と何時間走ってもまるで気分悪くなったりしなかったのも事実だったから、もしかするとあながち兄の発言も大げさなばかりではなかったのかも知れない。そしてまた、今の俺じゃそんな兄の足下にも及ばない事も事実に違いない。
と、深夜の町を抜けて高速へ入ってから二度目の県境を知らせる案内板が見えてきた。そろそろ戻らなければ母親が目覚めた時に俺の姿が無くて心配するだろう。
気分が完全に落ち着いたかと言えば、そんな事はちっとも無かった。第一、そもそもどうして飛び出してきたのか、理屈としてはまるで分かっていないのだから、それもある意

味では仕方ない。いっそエンジンが火を噴くくらいまで走り続ければ何か変わるのかも知れないけれど、残念ながらそこまで現実を無視出来るほど強くなければ弱くもない。
そこで俺は少なからずやりきれなさを残しながらも、次の出口で降りて、そのままUターンしようと決めた。
出口で係員に手渡した高速料金は結構な金額に上ったが、何となく人と接せられた事にほっとしたのも本心だった。これが無人レーンで自動的に支払いを済ませる車であれば、それこそ本当に俺はいつまでも諦められずに走り続けていたかも知れなかった。
年配の男性に教えられた通り、二つ目の信号で車の鼻先を大きくくるりと転回させ、再び元来た高速道路の反対車線へと入っていった。だけど今度は、先ほどまでみたいな全開走行をしようという気になれなかった。早く帰らなければと思う反面、せめて少しでも長くこうしていたいと思った。だから、とりあえずラジオか音楽でも掛けてみようと考えたのは、別に最近の兄の姿を確かめたかったと言うよりも、そんな葛藤を紛らわせる為と言った方が正しかった。そして俺は思わず声に出して笑ってしまった。
走行車線を法定速度で流しつつ確かめた助手席のダッシュボードの中には何枚ものCDが納められていて、果たしてそこには邦楽やロックに混じってちゃんとジャズの名曲集があった。予想していたとは言え見事なくらい期待通りの品揃えに、ついついブレーキを踏んで路肩に車を寄せてしまわざるを得ないくらいに大声で笑った。兄ちゃんはやっぱり兄ちゃんだったと、あんた何も変わっちゃいなかったんだなと、誰の目も耳も気にすることなく大声で泣いた。
結局、俺は兄のとっておきだろうジャズの名曲集でなく、俺たちの世代からすると知ってはいるものの少し懐かしい邦人バンドのアルバムを選んでプレーヤーに入れた。そして今度こそ、関西弁のボーカリストが男臭く熱唱するラブソングを大音量で流しながら、それを掻き消すくらいにアクセルを踏み込んでエンジンをうならせた。大口を開けて叫んでも声なんかまるで聞こえなかった。だから俺はもう自分でも泣いているのか笑っているのか分からなくなっていた。
なぁ、兄ちゃん。なぁ、兄ちゃん。あんた、ちゃんと月へと旅立てたのかよ。こんなに大事な足代わりを残して、それでもちゃんと自分の足で月へと向かって歩き出せたのかよ。教えてくれよ兄ちゃん。一体、どれだけの速度で飛ばせば、月に着くまでに歩くあんたに追いつけるんだよ。スピードメーターの針が振り切り、エンジンが勝手に速度を緩めるくらいまでアクセルべた踏みで、タコメーターの針はとっくにレッドゾーンに入っていて、それでも全然ちっとも白いライトの向こうへ目を凝らしたって兄ちゃんの後ろ姿さえ見えてこないのに。後どれくらい速度に時間を掛ければあんたまでの距離を縮められたって自信を持つ事が出来るんだよ。
なぁ、兄ちゃん。なぁ、兄ちゃん。なぁ、兄ちゃん。俺、頑張るから。大人になって、母ちゃんの世話もちゃんとして、この車だってこれからもずっと大事に大事に愛していくから。だから頼むから、もう一度だけでも良いから俺に格好良く笑って「お前なら大丈夫だ」って、「お前は俺の弟なんだから」って言ってくれよ。
応えてくれる相手はいない。失った恋人を想って泣くようなエンジンは俺への言葉を紡いではくれない。そして俺と車は揃って同じ方向へ走りながら兄へ届けと全力で叫ぶ。
いつしか世界はうっすらと明らみ、月は空へと溶けていく。気付けばあの月まで後残り

二十五万と飛んで百キロ。きっと家に着く頃にはまた少し月まで近づいている。
振り切れては戻って振り切れては戻ってを繰り返す速度計の隣を見る。家を出る際に満タンだったガソリンは、それでもまだ半分以上残っていた。

〈了〉